

15-4 指揮労働の歴史的意味

「資本主義的生産それ自身は、指揮の労働がまったく資本所有から分離して街頭をさまようまでにした。だから、この指揮労働が資本家によって行われている必要はなくなった。……つまり、それが社会的労働としての労働の形態から生じ、一つの共同の結果を生むための多数人の結合と協業とから生ずるかぎりでは、この労働は資本とはかかわりがないのであって、それは、ちょうどこの形態そのものが、資本主義的な外皮を破ってしまえば、資本とはかかわりがないのと同様である。もしも、この労働は、資本家的労働として、資本家の機能として、必要だ、と言うならば、その意味するところは、資本主義的生産様式の胎内で発展した諸形態を俗物はその対立的な資本主義的な性格から分離し解放して考えることができないということにほかならないのである。……どの恐慌のあとでもイギリスの工場地帯でよく見受けられるのは、以前の工場主たちが前には自分のものだった工場を、今では、しばしば自分の債権者でもある新しい所有者の管理人として、安い賃金で監督しているということである。」(大月版『資本論』④ P485B9-486F10)